

北海道札幌

農辰科太字

八月三郎叔台屋



回



九月十日
朝八時

大阪市西區南堀江通壹丁目
勝本忠兵衛

お登 帰来 毎 日

懇 本 燭 附 有 奉 石

私 共 左 京 下 矢 記

の 敷 下 河 下 石 下 石 下

種 用 取 形 申 上 下

ざ っ っ 予 考 急 進 せ じ

今 ト 下 下 今 下 流 下 下

タ 下 下 下 下 下 下 下

下 下 下 下 下 下 下

コ ー ナ ヤ ン 下 下 下 下 下

理 念 下 下 下 下 下 下

下 下 下 下 下 下 下

下 下 下 下 下 下 下

理念の程を表明する

のうらやまに 悦ぶかもしるは

不のりし遠路に 今度

しか我の心 敵に流る

りてナシ 思ふかあすは

此の事しつるに した

水がこころ 西鏡昔に 吾に

そこの了は ね段に

まじあかりの守りかた

神下階の源もはま大

アの地うかりこころ

ひろやう 念のりかた

ヒカヒ 田舎のあむし

背の向は輝くお神

あまのいふまのし 其の

たのしみ

...の...の...の...

...の...の...の...其...入流

大...中...の...子...了...

カ... 今朝...地...校

...の...の...の...階...

...の...の...の...方...

...の...の...の...の...

...の...の...の...の...先生

...の...の...の...の...付

...の...の...の...の...氏名

...の...の...の...の...の...

...の...の...の...の...の...

...の...の...の...の...の...山...

...の...の...の...の...の...の...

...の...の...の...の...の...の...

...の...の...の...の...の...の...

...の...の...の...の...の...の...

他は神の御心にて本が

月をりすついでに

執着心にていふと

ナリともよき事

リガサは舟がとか決り

つげらるるは

是の世の上の生を

為す事かを

中い度とん

どうよあ

海にうなる

いふ名

舟

いは

不

大

其

不、寂しき自にちるす

つは又

不、竟

大、何、す、ま、る

一

ら、あ、と、探

探、下

二、仰、あ、ま、の、こ、り、や、ん

よ、う、ま、の、こ、り、や、ん

あ、ま、の、こ、り、や、ん

あ、ま、の、こ、り、や、ん

あ、ま、の、こ、り、や、ん

あ、ま、の、こ、り、や、ん

電報の宛先は一、桐城の某、在任中
此一主婦、在京の厄、桐城の

あつて此のまゝ、あつてあつて

の隣、あつてあつて、あつてあつて

し、あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

夕刺アサカマ父ニアウと申

早う今年朝の各勤了と云已

と随分確定の旨掲載の

店に先兄の在案申す所

のんか出来得る若紙念頭

御々々とうり地よりや聲援

新ふや七幾半のり宜敷

新ふ

以下火中

少せ一身上の件 平代監査役

平代女と兄弟の事柄とし平代女が何時も出社
 現況を不知らず身大の同情を向し其れは
 強軍拙宅の念老兄の事出鼎一の書面不
 一覽に供し小更甘女は涙を揮ひ此熱意なる
 ハ田村氏の意氣に實に敬服をこしく又念老の苦心深
 く理解力ある君を實こよに親敬よ以身をそ
 持たれたら生繳力なりと念しハ田村の下に下し
 君が相違相白となり最良の勝利を俾せしむ
 心し意を強ふせよと申共れは
 此人を極く感懐家こし熱意なる善意ある人
 たるを案わて不知らぬん

と色々協議他人云

創業の際失費多し半年や一年は
 到底苦む失政類々踏出さへく其
 際彼レ為柄は常務(おせ)の善能を叫び
 味主の撤さ下葬はし八方より政敵争かし

たうと案ねて承知致度なり
たうと案ねて承知致度なり

と色々悩議仕人云

創業の際失費多く半年や一年は
到底苦盡失政類々踏出たべく其
際彼し後には常務(社長)の各能を叫び
株主を撤さずばし八方より政敵や切し
強るべきと排斥企ふの天下(後お)とな
るべし之は火を親るより樟かたり会社
成立後の彼れ等の態度を叫ぶるに
野心得々上記の計畫ありは想像ある
に難からん小生の現下の立場は非常
苦境あり都合能く行方ば當此の
とあり一つは速く一挙として葬らる
るの運命に如え小此際常務と云ふ
責任上の位置を退き一平の取締役
として在仕彼れ等のたゞ此を視察
合能く^{行方}當此一つは速くは即ち失敗を
を暴露出来ぬ小生等全志の若き
撤さ株主を^平はし八方より政敵や切し
一舉にして採取るは策の最上上

たう者

と考へられぬと高見如何

林如歸云々、不洗申せんかとね

少る方方も寔に家内より

如かこも小生の各能不徳を者

表之行とねな心地録し 踏破

の一言は入る月一より

少る者方々実此字
妙なりともいふの無能不徳を著

表之行と標なる心地録し 踏躑

の一居共欠 測一よりも 林氏 あり

将氏之法あるは自ら得取

の正と録し其れと申すより底ん

測一よりも 勘よりれば

先月初旬より物色せる 経緯部也

候神者少様前業のお授た西

の事と(牛内の折せ写) 併々才

旅録して其れと名己の際

しつめられ一書の下に作り

学問上の傾向其他を指摘し

て互射したることをいへば新

意あると申されたる由

又の説及青果、正宗の二

名を入社せしめたと申され

の故之又現下と仮し 義

らうるをいれる 義一より明説

時代の作名を載せし書巻をま

たかと思ふは多たれば全評

川村云又... 大... 事

らるるを承る義一と明説

時代の作名を載せし書は

古かよ書は存せられは全評

の題意部某も大體完成し

たりとからし多氏大弱り

ありし由一語があった

まれ入社して此れによる

ありし故之又言下、祥瑞

神の趣大岩止の何

徳一の曰く為氏は何等の

確信なき者之款破はら

た意意も何も切し其に疑

をいさ出さぬ相甲某の

心を鳥居氏の性格を

た意の店に別收贈は

たためも心をこめて個體

を考揮一は仕事をせぬ迄

のりりた之敵は得る事

立ちぬもふ色こゝに個性
を著揮一に仕事とせぬと
のうらやみ之敵は将、存
能者しあり
殊秀出来らゝ知為、巧也、秋、
百株ふ先見、如家書撰入
の書道、為、此、最、好、の、晴、利
を、持、得、る、こ、は、此、際、意、匠、の
地位と避ける事、美、金、の
築、こ、る、し、と、七、七、考、ら、れ
明、十、二、の、名、を、後、合、に、如、家
の、り、が、本、の、年、後、信、深、め、ん
考、こ、さ、せ、ん、と、此、に、
心、を、ふ、老、兄、よ、う

フコシタタコナノフコシタ

この電、接、白、信、に、お、謝、を、未
著、い、は、さ、ん、所、今、着、お、す、

この電報は、先づ、敬請を
著し、その旨を、おし
やう

オオサカセンシンハンバイ
チヨクシリイニケツスハンバ
イブノサイセンノトリヨク
タコウ

之を誤字あり

古改直字を改書し、
照書部の最善の努力を
与へて

の意を味あふし、と、考へ
同ら照書部が、
作ぬ部がたり、
判ねて、
世の評

沙一、
良とありたる、
井村氏の、
五りと、

保証めん

作内部分たり (世の評
判極く悪くは

過一も時口の上向ふ家
ひるひの息はふをい

良とありたる標は考は

井出氏の建言と存係し

五日と強かざる保証

石河原久申出はな

書局の尺申は

ありては

たむ十日

法を

一冊を